



1 太陽を求めて船に乗る。これが英国の伝統的な船旅のスタイルだ。チーク材を敷き詰めた温かみのあるデッキで皆のんびり過ごす 2 サガの各船にはダンスの腕前を存分に披露できるダンスホールがある。一人旅の乗客のために、ダンスパートナーも乗船 3 終日航海日、英国人乗客は実に旅慣れた様子だ

現代のクルーズ客船ではあまり見かけないシングル客室も完備。結構広くて快適



ヨーロッパの個性派クルーズへ
サガ・クルーズ

英国からの乗客が多数を占めるので、太陽を求めて地中海やカナリア諸島、マデイラ諸島をゆったりめぐることが多いのが特徴だ。また世界一周こそ英国人の船旅の真

骨頂。毎年1月から4月ごろまで100日以上かけて、世界の国々をベストシーズンにまわっている。そんなサガ・クルーズだが、日本で販売しようと思っただけからの船社との契約交渉は、難航を極めた。転機が訪れたのはブライベイトで乗船した「クイーン・エリザベス2」最後の大西洋横断中のこと。偶然にも船内でクルーズ業界に詳しい人物と二緒する機会があったのだ。世界中の船社に通ずる彼が多なる尽力をしてくれたおかげで、今年ようやく販売にこぎつけた。英国以外では、オーストラリアとアメリカに次いで、日本が3カ国目の販売国となる。

昨今の日本のクルーズは、ようやく少し定着したといったところだろうか。一方で、欧米には今から約40年も前にこんなにもエレガントな客船が誕生していて、優雅な船旅を楽しむ人たちが存在していた。そして21世紀の現代、サガはオースシャンライナー華やかかなりしころの時代を受け継ぐ、数少ないクルーズラインだ。

いまならまだ間に合う。古き良き船旅が、そして往年の名船を現代で味わたる数少ないチャンスが、英国が誇るサガ・クルーズに残されている。

シアアの効いた船体デザインの「サガ・ルビー」。名門船社を渡り歩いてきた最後のオーシャンライナーだ



英国流 古き良き船旅は、 サガ・クルーズにあり

今年、日本で初めて販売が始まった英国のクルーズラインがある。歴史を刻んだ名船隊を擁し、英国からの乗客は50歳以上限定。伝統を受け継いだスタイルは、古き良き時代の船旅を現代に伝える。その名は、サガ・クルーズ。日本での販売をスタートした旅行会社の代表自ら、このユニークな船会社を紹介しよう。

写真・文 東山真明(マッキントッシュ)

最近のクルーズビジネスを見てみると、客船はひたすら新しく大型化に向かい、徹底的にコストダウンすることにより利益を生み出す仕組みになっている。それを見ていると、ふと誰のためのクルーズなのか……?という疑問が湧いてくることもある。

そんな思いが心の根底にあったので、英国の船会社サガ・クルーズには、ずっと興味を持っていた。かの船会社は何より、古いものの価値観を大切にしている。とりわけ元「ビスタファイヨルド」いうビ

ツグネームの客船を所有していることが大きな魅力でもあり、ぜひとも日本にこの船会社を紹介してみたいと強く思っていた。

サガ・クルーズの母体となるサガは、保険業、出版、旅行業などを手がける英国の大手企業だ。1996年よりクルーズビジネスに参入し、「サガ・ローズ」(元「サガファイヨルド」)、「サガ・ルビー」(元「ビスタファイヨルド」)の2隻からスタートした。サガ・ルビーの前身であるビスタファイヨルドは1973年、ノルウェーの名門船



今宵はフォーマルディナー。キャプテンズ・テーブルに招かれるステータスを得た乗客は、白や黒のタキシードを完璧に着こなしている。これが本物の英国紳士



左：スペシャルティレストラン「ビュー」。サガに似合わず(?)モダンなインテリアとテーブルセッティング。カバーチャージなしで、かなりグレードの高いコース料理が堪能できる
右：「イギリスらしい朝食を」とオーダーして出てきたのが、ステーキ(朝から!)と目玉焼き2個。皿を見て「これは顔をイメージしてるのかな?」なんて言いながら、ウエーターがサーブしてくれる

英国色漂う食の風景

メ インダイニングは実に全長の約半分を占める大きさがある。建造当時2万5,000トンは大型客船の部類で、655人もの船客が一度に食事を楽しめるのはぜひ良かった。ワンシーティング制のダイニングは名船の証しだったのだ。

とある日のディナーは、ラムのキティ(肝)の前菜に始まり、コンソメスープ、プライムリブ(厚切りのローストビーフ)と英国色が濃いメニューだった。プライムリブにはピリッと辛いイングリッシュマスタードがよく合う。メニューを見て迷っていると、「おいしいカレーがある」とウエーターが提案してくれた。それまで気付いていなかったのだが、メニューの中のチキンアンドリーと書かれているのが実はカレーだった。言葉どおりとてもおいしい。天気が良ければ船尾のプールデッキでデッキランチ。黒ビールで一杯やりながら、ローストチキンをいただく時間は最高だ。



テリーヌのゼリー寄せは、とてもやさしい口当たり。乗客が600人程度だからこそ、手作り感のある一皿が生まれる

ヨーロッパの
個性派クルーズへ
サガ・クルーズ

大人のぜいたく、満載の エンターテインメント

サ ガはダンスタイムが素晴らしい」との定評がある。二つの上品なダンスフロアでは、毎晩長めのダンスタイムが設けられている。見とれるほど上手な乗客もいれば、昼間のレッスンで練習して本日デビューしたばかりの乗客もいて、皆が楽しい時間を過ごしている。

そのほかのエンターテインメントは、ジャズやクラシックの生演奏など、定番のものが多い。英国人乗客が生演奏を、品格を持ち備えた大人ならではのぜいたくだと考えていることがよくわかる。カードルームや図書室などは、実に落ち着ける空間になっている。カジノはこの会社の乗客の嗜好に合わないのか、作られていない。



上：サガのエンターテインメントは、落ち着いたものが多い。クラシック音楽もその一つで、美しく張りのあるバイオリンの音がホールいっぱいに響き渡る
左：サガと言えばダンス。ビッグバンドが奏でるスウィングも軽快だ。昼間にはダンスレッスンの教室もあり、人気が高い



左舷にある「サウスケーブアー」。ビスタフィヨルドとして就航したときからこの位置にあったはず。濃い色のウッドパネルを多用したバーカウンターが、とても渋い

左：海側の快適なツインルームは、バスタブ付き。就航して約40年、たくさんの乗客を迎えてきた
右：「こんな書齋が家にあったらなあ」と思わせる、実に落ち着ける図書室



とあるパブリックスペースの一角、窓に沿ってゆったりと落ち着けるイスが並ぶエリアは、QE2を思い出させる。シックな色合いは、まさに英国人好み



操舵室の左ウィングに備わっている古い機器。当然、今も現役で作動している

クラシカルな空間

サ ガルビー」は今の新しい客船とはまったく異なる素材、工法で造られている。ウッドパネルを多用し、暖かみのある船内インテリアは、万人に安らぎをもたらす。船齢は38年で、客室、特に水まわりは完璧に改装されており、温水の出具合も良く、快適に過ごせる。そして元来高級志向の客船として建造されたことから、バスタブ付きの客室が多いのも特徴だ。パブリックスペースに関して言えば、ファブリックは新調されているが、基本構造はほとんど建造当時のまま。特に船首部分にある「ブリタニアラウンジ」や、中央部の「ボールルーム」にはダンスフロアがあり、船の幅をいっぱいに使ったぜいたくな空間になっている。往年の客船を思い起こさせる懐かしい雰囲気、ここにある。

クルーズ識者に聞く! サガ・クルーズの魅力とは?

大人の 落ち着いたクルーズを

客船評論家 ダグラス・ワード氏



長い歴史を誇る英国の船旅には、仲睦まじくつろぎ、語り合う夫婦がよく似合う

いい素材を たっぷり使った客船

クルーズ・コンサルタント 増田和美氏



あめ色のウッドパネルを多用した、美しいエレベーターホール。オーシャンライナーだったころの面影が今もしっかりと残っている

50歳以上の方々にとてもやさしい2万5000トン級の客船2隻を運航する船会社です。元キユナード・ラインの重役が創業し、船長やクルーズスタッフらも「クイーン・エリザベス2」などに乗船していたイギリス人が多く、洗練された英国客船の雰囲気を感じられることでしょう。



ダグラス・ワード
ベルリッツ刊『CRUISING & CRUISE SHIPS』の著者として知られる客船評論家。本誌で新連載「ダグラス・ワードのベスト・クルーズ」(88ページ〜)も開始した。

(※) マナーハウス: 田園地帯にある中世の荘園領主の邸館

で、入港の風景が見られるほかウオーキングも楽しめます。サガ・ルビーには4人ぐらのジェントルマン・ホストが乗船してダンスのお相手をしてくれるので、ダンスファンには人気があります。乗客定員の500〜600人の大部分はイギリス人なので、きっと落ち着いた大人のクルーズを体験できるでしょう。

「サガフィヨルド」、「ピスタフィヨルド」の時代に仕事とプライベート両方で乗船しています。まずこういった歴史のある客船が現在も運航しているのが珍しいですよ。当時の最高級を誇る客船だけあって、たとえばデッキなどにも高級なチーク材が使われていて、とても落ち着いた印象です。デッキを歩いているだけで、しみじみといい素材を使って丁寧なメンテナンスをしてきた客船だということがわかります。



増田和美 (ますだ・かづみ)
数々の客船に乗船してきたクルーズ・コンサルタントであり、文筆家としても活躍中。次ページからの「リバー・パロネスでめぐるセーヌ川」の撮影、執筆も担当した。

クルーズに出たいなと思わせる客船です。船はよく女性にたとえられますが、サガ・クルーズの2隻は、さしずめ数々の経験を積み、一層磨きがかかった大人の女性といったところでしょう。実際の乗客もやはり大人のお楽しみを知っている人が多く、若い人が乗船したとしてもいろいろ学べると思いますよ。



マデイラ島ファンシャルの夜景。サウサンプトンから4日間の終日航海日を経てたどり着いた乗客を、絶品の夜景が出迎えてくれた

サウサンプトンを出港して4日目、見えてきた島影は大西洋のマデイラ島。船長の粋な計らいで、美しい夕景の時間帯に航行した



右: 船尾にあるデッキの一角。「このカーブは何のために作ったのか?」。そんな不思議な場所が、昔ながらの客船にはたくさんある
左: 船尾に広がるプールデッキ。往年の客船に欠かせない場所だ

古き良き クルーズライフ

サガでの一日は、指定の時間に客室に運ばれる紅茶で始まる。その後、メインダイニングもしくはビュッフェの朝食へ。それが終わると乗客は天気良ければチーク材を敷き詰めたプロムナードデッキをウォーキングしたり、船尾のプールデッキでブランケットを受け取って読書をしたり。皆思い思いの時間を過ごしている。夕方、バーに顔を出せば、なじみになった乗客と話も弾む。

とある日、上級オフィサーに、船齢を重ねたこの客船について尋ねてみた。「トラブルは起こるよ。けれどすべては経験済みなのでまったく問題ない。電気系統のトラブルはむしろ新しい客船のほうが起こりやすいし、厄介なのは新しいテクノロジーだから未経験のトラブルも多いことだ」。新しいことがすべていいとは限らないとあらためて認識した言葉だった。



終日航海日、バーで黒ビールを飲みながら新聞に目を通すイギリスの紳士

取材メモ
サガルビー 西アフリカのミステリー
日程: 2010年11月5日(金)~12月6日(月) 32日間
クルーズ代金: 4,499~9,703UKポンド
船名: サガ・ルビー(サガ・クルーズ)
総トン数: 2万4,492トン
乗客定員: 655人/乗組員数: 380人
問い合わせ先: マーキュリートラベル
TEL.045-664-4268
※読者割引10%あり。スケジュールは133ページ参照